

本を選ぶ

- 本と人をつなぐ仕事
- 世界が違って見えるために
- 司書の仕事の面白さがわかった
12年目でした
- DMかたろぐ

2019年(平成31年)4月20日

●発行/ライブラリー・アド・サービス

〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

<https://www.las2005.com>

ろん・ぼわん

本と人をつなぐ仕事

沼田 陽子

公共図書館でレファレンスを担当しています。カウンターには、毎日、さまざまな質問が持ち込まれ経験と資料をフル回転させて解決に向けてお客様のお手伝いをします。ネット検索でポンっと情報が示される時代ですが、カウンターにはいつもお客様がいて常に何かを探している状態です。仕事や生活のなかで必要に迫られてという方もおられますが…。最初は緊張しているのか表情も硬いのですが、インタビューを重ねて資料を提示していき、解決に近づき調べたいことがわかって解決に近づくと、瞳が輝いてきます。お帰りになるころには、晴れやかなスッキリとしたお顔で資料を大事に抱えて帰路につかれます。

学校司書も生徒と本をつなぐ大切な存在です。資料を予算通りに購入して本棚に並べ、管理しているだけでは役割の半分です。図書館の仕事は終わりがけないので、最初はこれだけで精一杯かも知れませんが、資料に慣れてくると次は普及活動です。物語や図鑑、1冊の本に夢中になったことのある人は、忙しくて読む時間がなくても、何かきっかけがあれば必ず読書することを思い出してくれます。読書が好きなのは、そのことを知っています。逆にまだ、運命の1冊に出合っていない子には、まず、図書館に足

を踏み入れることからはじめます。大人でも案外そうなのですが、本の探し方、借り方がわからないという、初歩的なつまづきから解消してあげましょう。新学期や読書週間に図書館ツアーや利用ガイダンスを行うと良いでしょう。それと、生徒同士の口コミが絶大な影響力を持っています。図書委員によるポップ作りやビブリオバトルなども影響力があります。

公共図書館には、学校図書館運営のためのアイデアを紹介している資料がたくさんあります。生徒が読書に興味を持つ仕掛けづくりで感心したのが、「読書おみくじ」。本のタイトルが書いてあるだけのシンプルなものなのですが、今日の運勢を占う気軽さで手を出すことができ、どんな本と出合うのだろうとワクワクする工夫です。これなら、ゲーム感覚で楽しく読書に親しめると思います。同じように、本を袋のなかに入れ、何が入っているかわからない「読書福袋」も読書好きな人には、新しい出会いのきっかけとして人気があります。

学校図書館で一番多い質問に「何かおもしろい本はない？」があると思います。司書が読書知識を持ち備えることは重要ですが、生徒に寄り添い、インタビューをしながら、一緒に探してみてください。読書が苦手な子、自分の好みを伝えることができないシャイな子には、貸出は無料なこと、途中で断念しても悪いことではないし、感想は尋ねたりしないことを伝えて本をお渡ししてください。これだけで、子どもたちの図書館のハードルがぐっと下がります。おもしろい本に出合うとしゃべりたくなるはずですから、結果はおのずとわかります。

(ぬまた ようこ:帯広図書館司書)

世界が違って見えるために

～学校図書館創成のころ～

武田 佳子

たとえば校舎の片隅の古くてひっそりとある図書室に、読まれることを期待して息をひそめる本があり、その1冊に出会うため心ときめく人がいる。本と人とを結ぶこの場所で小さな奇跡が生まれる瞬間。

●本の魅力を伝えるために

少し前まで学校図書館の学校司書として勤務していましたが、遡って、その中学校に正式に通い始めた頃のことです。そこの図書館ではカビ臭い古い本などが廃棄され、総冊数が大幅に減少したことによる寄贈も多くありましたが、【9類・文学】以外はどうしても手薄で、配分比率に則った蔵書構成に近づくのはずっと先のことでした。また、そこは、学校司書も参入を始めたばかりの「黎明期」といった感じの図書館で、当然ながら、日々立ち上げの仕事に追われることにもなりました。

物心がついて手あたり次第に本を読んでいたことから、自分の原点は十代の頃に出会った本にあると感じていました。そんなひとりの大人が、教室とは異なる空間に本との出会いの場を演出する役割を得て、当初は、どのような棚づくりをするのかを要の仕事として臨んでいました。学校現場での選書は、年間授業計画に沿った図書館の活用を想定し、各教科の幅広いニーズに的確に対応することが肝要ですが、主たる利用者である「中学生」を見定め、図書館や本の魅力を知ってもらう努力も欠かせません。そのためにも、まずは来館してもらい、何げない交流を地道に重ねることが大前提でした。

●図書館は遠くにありて

ともあれ、学校図書館の立ち上げに関われたことは願ってもないことでした。図書館の認知に繋げようと、足りないこと、できないことに知恵や工夫を総動員したからですが、そこには、越すに越せない壁もありました。図書館が利用者にとって遠い場所にあるという変えようもない現実です。「図書室、

遠い！」という生徒からの訴えはいつものことで、放課後は部活などに追われるため、実質15分足らずであっても、昼休みを図書館で過ごしたい生徒は給食が終わると息せき切って来館するので、司書としては申し訳ないような複雑な気持ちでした。

その頃、授業関連の本を図書館で展示するといった授業支援の要請はあっても、こちらから教室に出向くチャンスはなかったので、一般的な広報活動の他には積極的に図書館をアピールする術もない状況でした。そこで、足を運んでくれた生徒や図書委員にこそアプローチすべきと、図書館を良くする仕事づくりに精を出しました。生徒は、意味さえ見いだせば図書館での仕事に抵抗はないと感じたからです。

●中学生を見ていて

仕事といっても、さりげなく生徒の輪に入って協力可能な役割を上手に持たせることで、例えば、「イラスト描くのが得意な人は?」「力自慢は誰?」などといった具合です。要は、ここは漫然と本が集められた部屋ではなく、自分たちの図書館として皆で創り上げるものだ、と、何より、生徒自身に気づいてもらうことが肝心の思いがありました。また、何かと地味に見られがちな図書委員ですが、何とでもなりたかった生徒も少なくないので、「図書委員に輝いてもらうために図書館があり、司書がいる」と応援しながら一緒に仕事をします。学校司書が生徒たちと交流を図ることの意味は、エピソードを積み上げ、「学校図書館」というものの輪郭を描いていくことにほかなりません。

ほかに考えたことは、人気の【9類・文学】とは別個に生徒を惹きつける魅力ある棚づくりで、息を切らして来るに値する本を備えることでした。カウンター越しに眺めていると、【貸出・返却】だけではない図書館に来る目的や過ごし方は多種多様で、“マニュアル”にあろうはずもない新鮮で興味深いものでした。ある日のこと、棚から取り出した

1冊を囲んで和んでいるグループに目が留まります。本は【4類・自然科学】でしたが、その後も似たような談笑風景を目にして、本を手を打ち解ける様子は学校図書館にとって好ましく映りました。



上り始める密度の濃い時間を共有します。介在する大人としての影響力、距離感なども考慮しつつ、この時期にどのような本との出会

●個別のニーズに応えるということ

ひとりでも複数でも図書館を利用する中学生には、たとえ一時でも「場」としての居心地の良さの提供も求められていると、利用の様子を見ていて実感しました。そのうち予算も安定し、読書テーブルの脇にあり、写真や図版が豊富で多彩な【4類・自然科学】の棚を意識した選書を始めました。そして、【2類・歴史】、【3類・社会科学】と徐々に増え、「誰かに教えたい」と思える本が並ぶと、生徒と行う本の展示にも力が入り、図書委員会や図書館を使った授業での本の活用にも繋がりました。

また、生徒が図書館に対して求めるものはそれぞれ異なります。明確な意図を持って目的に向かうというより、とりあえず来館はしたものの…という生徒も多く、また、必ずしも本を求めて来たわけではない場合もあります。そんなとき、本はひとまず脇に置いて、話に耳を傾けることも身近な学校司書であるがゆえで、学校図書館ならではの光景です。学校図書館でのレファレンス・サービスとは、「生徒の微妙で繊細なニーズを見極め、あるいは引き出し、全面的に認めようというフォロー」することで、そのためにすべての本を把握するプロがいて、周りに本が控えているといった気づきもありました。

●世界が違って見える本

生徒たちが頻繁に学校図書館を訪れ、当たり前のようにそこで過ごすようになると、本も動くようになり、学校の図書館としての機能もいよいよ活性化されます。そして、「成長期」の学校図書館としての様相を見せ始めた頃、“プラスアルファ”のある(いまを生きる中学生の心に触れて何かが残る)選書心がけたく思いました。そんな本がどの棚にもあることを知ってほしいという狙いもありました。

ひとりの中学生とは長いと3年、大人への階段を

いが設定できるのかと「本の持つ力」を再認識し、読書することで見る目が広がり、世界が違って見える本に出会って欲しいものと思いました。彼ら彼女らに関わるうちに、持って生まれたままで十分輝いているのに自信が持てず、自分らしさが発揮できない生徒の多いことがずっと気になっていたからです。

●本は、「本」を呼ぶ

4類の蔵書から、理科の教諭だった著者の本を3冊。自然に恵まれた学校で、生徒たちと交通事故死したタヌキなどの解剖や骨格標本を作製した『僕らが死体を拾うわけー僕と僕らの博物誌』(盛口満著/どうぶつ社/1994年)、『ぼくは貝の夢をみる』(盛口満著/アリス館/2002年)では、貝を集めていた著者の少年時代のエピソードや教師を目指すまでが描かれ、『小さな骨の動物園』(盛口満ほか執筆/INAX出版/2005年)は標本作製技師となった元生徒も登場、骨格写真を集めた装丁の美しい本で、いずれも、自分らしくあるのは素敵なことだと伝わります。

他にも3冊。理科だよりに載せた中学生の素朴で驚きの視点をまとめた異色のレポート『女子中学生の小さな大発見』(清邦彦編著/新潮社/2002)、国立天文台を起点に視点は急速に天空へと上昇、宇宙の壮大なパノラマを本で体感できる『宇宙の地図』(観山正見ほか著/朝日新聞出版/2011)、動物写真家がカラスの巣を撮り続けて30年、見えてきたのはカラスの視点から覗く人間の世界だった『カラスのお宅拝見!』(宮崎学著/新樹社/2009)など、視点が変わって世界が違って見える4類の本です。

周りを本に囲まれてひっそりとある部屋をたずねたら、そこで手にした1冊はまだ見ぬ世界へといざなうチケット。変幻自在な万華鏡の鏡の奥をのぞいたように、世界がもっともって違って見えるために。

(たけだ よしこ)

司書の仕事の面白さがわかった12年目でした

星野 千鶴子

嬉しかったこと

今年度は、家庭科の授業でも下調べや調べ学習に使っていただきました。

一年生は「ゆかたを着る」授業があり、クラス毎に二人ずつ交代で着せて帯を結びました。図書館では、和服の作り方やたたみ方、帯の締め方などの載っている本だけでなく、伝統行事や二十四節気の事なども含めて本を揃えました。その本は英語の時間でも使われ、国語の時間の調べ学習にも使われました。

二年生は「献立を立てる」の調べ学習をしました。そして、自分たちで立てた献立が、給食のメニューに登場しました。

三年生は「保育」の授業で「幼児の発達と絵本」というテーマで家庭科の先生と司書で授業をしました。幼い子どもに読む絵本も、少しずつですが揃えています。

図書館の資料が活用されることを何度か経験して、今年度、英語科で図書館の本を使っていたくのに、国々の行事でなく、環境問題や貧困の問題を扱っていただきました。環境と貧困問題は三年生社会科の最後の調べ学習に使っていただきたいと思っていたのですが、英語でも使えることが分かったのです。

今年度図書館委員にお願いしたのは、本選びでした。12月の行事だったので、本の福袋というかクリスマスプレゼント風にラッピングしたラッキーバックでした。始めに図書委員が自由に1枚の用紙に一つのキーワードを書きためて、そのキーワードから思い浮かぶ本を3冊選んで福袋を作って、貸出をしました。

図書委員は、ワイワイと本箱の間に散って楽しそうに選んでいました。図書担当の先生方も乗ってくださいって生徒と一緒に楽しそうに選んでいました。福袋を借りていく生徒は何の本が入っているのかワクワクドキドキの体験で、読書の幅が広がりますように。この行事はまず成功でした。

ちょっと残念

2018年の本屋大賞第一位『かがみの古城』（辻村深月著／ポプラ社／2017）は予約をいただいたのに、順番がスムーズに進めないでいます。5月末に購入したのですが、分厚い本なので、何回も延長して読み切ってもらっているのに、次に待っている生徒に手渡せなくて、「ごめんね」と言ったら「クリスマスに買ってもらいました」。中学生がクリスマスプレゼントに本を買ってもらえることを嬉しく思いましたが、ちょっと複雑な気持ちになりました。

『かならずお返事書かからね』（ケイトリン・アリフィレンカ、マーチン・ギャングダ著／リズ・ウェルチ編／大浦千鶴子訳／PHP研究所／2018：アメリカの少女とジンバブエの少年間の実話）を読むと、社会科の本で国の特徴は調べることは出来るけれど、文章から感じられる多様な深さを感じて欲しいところです。図書館だよりに掲載しても手に取られないのは司書としては残念です。

2018年12月に守り人外伝として『風と行く者』（上橋奈緒子著／偕成社）が出版されました。この守り人シリーズ（1996年～）が次々に出版されていた頃、「次は未だ？」と聞きにきていた生徒は20歳を超えています、どうしているかな、と気にしています。

これからは

アメリカの高校生がディベートと呼ばれる話し合いで、日本への原爆投下について学ぶという『ある晴れた夏の朝』（小手鞠るい／偕成社／2018）では、高校生は学校図書館や公共図書館で主だった資料を集めているのです。これからの調べ学習の方向について考えると、私の勤務している学校図書館にディベートに使える資料があるのかと、改めて資料の収集について考えさせられました。ビジュアル的な資料だけでなく、きちんと読んで事実をまとめていけるような本も揃えたいと思いました。（ほしの ちずこ：中学校司書）